

# つらこみち 都羅の小径まち歩きマップ

都羅の小径は、連島がまだ瀬戸内海の孤島であったころ、道は山の中腹を通っていました。江戸時代になってつぎつぎ開発され、山裾に道ができました。都羅の小径はこの道のことです。



## 所要時間 距離

所要時間 片道約 2時間  
距離 片道約 6.2キロ

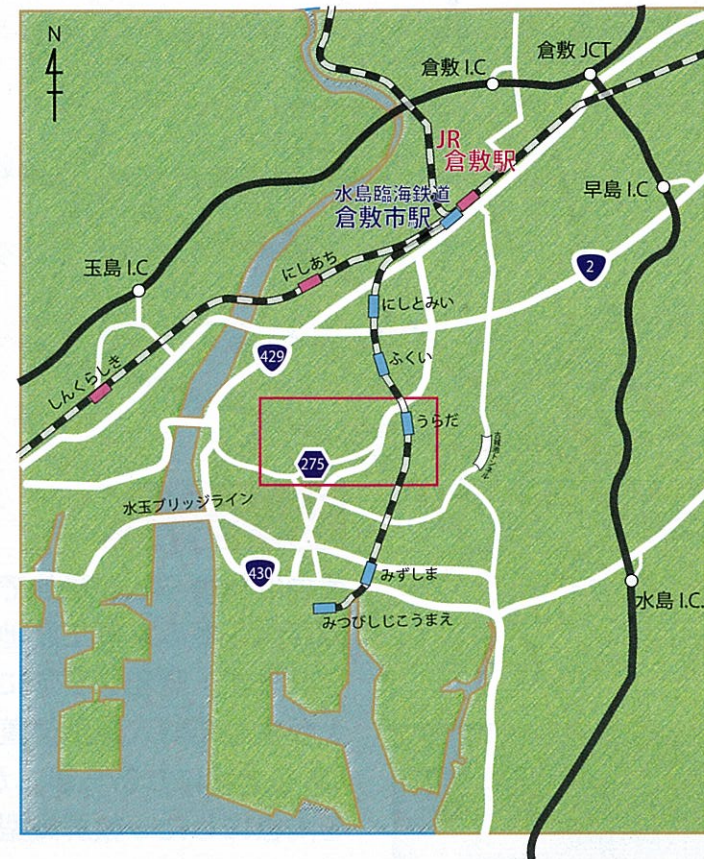
## 都羅の小径までのアクセス

### 電車

JR 倉敷駅隣接の水島臨海鉄道「倉敷市駅」から水島方面行きに乗り、「浦田駅」下車（所要時間徒歩 10分程度）

### バス

JR 倉敷駅（南口）両備バス 2 番乗場 小溝經由霞橋車庫行きまたは、倉敷芸術科学大学行きに乗り、「大江」下車（所要時間徒歩 5分程度）



お問い合わせ 倉敷市文化振興課（電話 086-426-3075）

## 明治詩壇の巨匠

薄田泣菫

明治10年（1877年）5月19日に生まれた。

明治32年、22歳にして、最初の詩集『暮笛集』を出版して以来、『ゆく春』『志ら玉姫』、『二十五絃』を刊行し、島崎藤村後の第一人者として、明治詩壇の頂点をきわめた。

明治38年の秋に発表した「ああ大和にしあらましかば」は、名詩中の名詩とされ、多くの若者に親しまれた。

大正元年8月、大阪毎日新聞社に入社し、大正5年から毎日新聞に連載した随筆『茶話』が好評となる。博識のうえ、話術も巧みだった泣菫の作品は、多くの読者を魅了した。



薄田泣菫 52才 昭和3年撮影

この当時、芥川龍之介、菊池寛などの新進作家を積極的に発掘し、文学界の発展にも貢献した。

大正12年、健康を害して毎日新聞社を事実上退社。その後も、パーキンソン病と戦いながら創作活動を続けるも、次第に病状が重くなり、昭和20年多感な少年時代を過ごしたこの家に帰り、同年68歳の生涯を閉じた。

## 生家概要

生家の母屋は南向きで、玄関から台所の土間部分は、吹き抜けになっていて当時の建物としては、珍しい構造である。全体の間取りは、「四国・九州間」と呼ばれる様式で、寸法は「中間間」である。

玄関から式台を上がると4畳半、その奥が5畳の座敷になっている。座敷奥には2畳の和室に1畳の押入れがある。ここは、当時、茶室として使われていたもので、3畳の和室として復元した。

庭には「七木」が作法どおり植えられており、梅、檉、モッコクなどの庭木や石を配しているほか、御所柿、夏みかんなどの果樹を植えている。生家で暮らしぶりを随筆作品の中に綴っている。

## 随筆に登場する生家

私の郷里の家は、見る影もない小家ですが、それでも祖父も父もが風雅の心があつただけに家の中が暗くなるのを厭わないうで、軒にはわざわざ板造りの孫庇をつけておました。冬が来て冷たい時雨がぱらつく頃になると、この板庇は、ひどく敏感で、うす暗い部屋のなかで炬燵にもぐってゐる私達の耳に、いち早く雨の音を伝へたものでした。

『太陽は草の香がする』

—「霰」より（昭和15年12月）





5 地蔵院経堂・輪蔵

経堂内部の輪蔵は中心軸に沿って回転させることが可能な八面に貼り合わせた書架に一切経を収納したもの。輪蔵を1回転させると一切経全巻を誦したと同じ功德があるとされています。



3 梅雲寺古墳

古墳時代後期の古墳。南向きに開口した横穴式石室。棺を納めている玄室の規模は長さ6.23m、幅1.35mで、高さは約1.7mです。東側の石材は寺の地圧により西側へ傾いています。崩壊しないように、現在石室内に山土を充填しています。



3 梅雲寺

遠く壽永の昔、源平水島合戦に敗れた木曾源氏の武将の妻が、亡き夫の霊を弔うため、自ら尼となり草庵を建てついにこの地に没しました。「手放せば夕風やどる早苗かな」と刻んだ芭蕉の句碑があります。

2 キリシタン燈籠

竿の部分が十字になっているためそう呼ばれるが、キリシタンがいたわけではなく、茶人大名として有名な古田織部が考案したといわれる「織部燈籠」の変形で、江戸時代後期にはやったデザイン。

1 薄田泣菫生家

明治詩壇で活躍した詩人、随筆家の生家を公開しています。開館時間 午前9時から午後4時30分  
休館日 毎週月曜、年末年始  
入場料無料、駐車場5台



15 笠取神社

海上安全の神様が祭られています。百数十間に及ぶ回廊は左右にめぐらされ、絵馬段から見る瀬戸内海風景は絶景。また、境内には数百本の桜があり桜の名所でもあります。



11 厄神社

境内は見晴らしが絶佳で、遠く瀬戸内を望み水島工業地帯が見られます。昭和29年には、郷土が生んだ詩人薄田泣菫の詩「ああ大和にしあらましかば」を陶板にした6枚屏風型の詩碑が建てられています。

9 宝島寺

貞観元年(859)に理源大師により開かれたといわれ、古くには広大な寺域を持っていたと言われております。しかし、戦国時代と江戸時代初期の二度の大火でほとんど全焼し、その後営々と復興がはかられました。

8 宝島寺仁王門

室町時代に創建された、桁行3間、梁間2間のけやきの円柱を用いた三間一戸の八脚門で、屋根は切妻造、本瓦葺となっています。また、左右に脇間のある様式で、両脇間は前後にわかれ、仁王像は後室に祀られています



7 八幡神社

全連島の総氏神。寂厳和上の「宝島寺記」によれば、源平合戦の後、那須与一が屋島の合戦で扇的的を射た矢が連島沖に流れ着き、夜な夜な遠浅の海に光る箇所があるのを怪しんで船を寄せてみると、柄に「那須与一」と刻んだ矢があったのでこれを八幡神社に納めたとあります。

